

速 報

なぜ“ジビエ”を使いたがるのか？ —利用拡大に関わる背景と要因の分析—^{*1}

寺下文貴^{*2}・奥山洋一郎^{*2}・滝沢裕子^{*2}

寺下文貴・奥山洋一郎・滝沢裕子：なぜ“ジビエ”を使いたがるのか？—利用拡大に関わる背景と要因の分析— 九州森林研究 77：141－144，2024 さまざまな場所で野生鳥獣被害が問題となっている中で、ジビエの利用が促進されている。本研究では、新聞記事や論文の収集、分析により、ジビエが一般市民その他さまざまな立場にどのような影響を与えているのか考察していく。現段階では、2005年に長野県信州を中心として野生鳥獣被害とジビエを積極的につなげるようになり、2018年にジビエに関する関心がさまざまな立場で高まったことがわかった。2018年は国産ジビエ認証制度が制定および運用開始された年であり、このことが関わっていると考えられる。2005年については具体的な出来事は今後引き続き調査を行う。

キーワード：ジビエ，国産ジビエ認証制度，シカ，イノシシ，鳥獣被害

I. 背景・目的

現在、日本全国で農林業を中心としたさまざまな場所で野生鳥獣による被害が多発している。

それに伴い、被害への対策という名目でのジビエ利用が推進されており、ジビエの取り扱い量は全国的に増加している(8, 9)。農林水産省の野生鳥獣資源利用実態調査によれば、ジビエ利用頭数は2016年にシカ、イノシシ、その他合わせて約89,000頭であったのが、2022年度には倍近くの158,000頭まで増加している(8)。推移を示したグラフを図-1に示す。

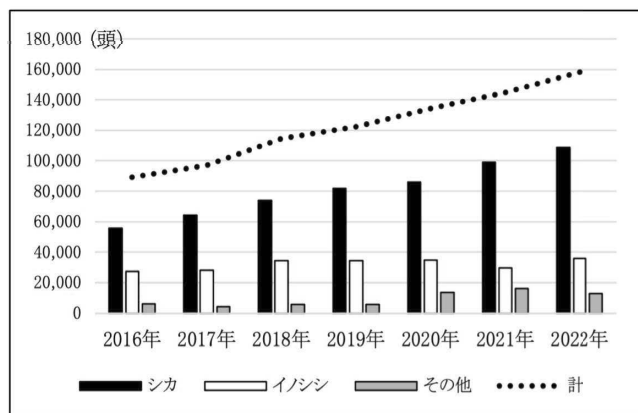


図-1. ジビエ利用頭数の推移
(農林水産省野生鳥獣資源利用実態調査統計表より筆者作成)

処理加工施設数に関しても増加の一途を辿っている状況であり、ジビエ利用は現在拡大しているといえる(10)(図-2)。

ただ、ジビエを利用する理由はそのような被害対策には限られない。ジビエの持つ食品としてのポテンシャルの追求、海外文化への憧れ等、さまざまな理由があると考えられる。しかし現在の日本

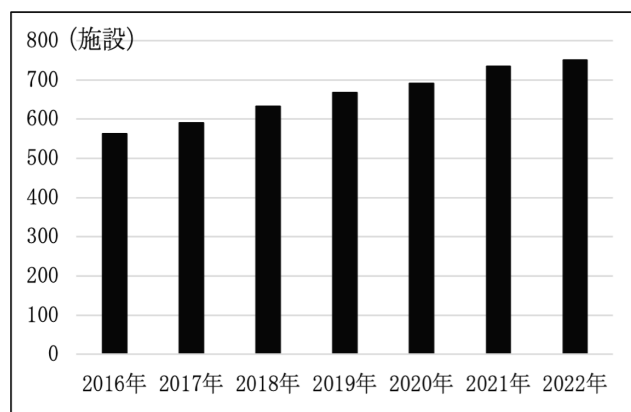


図-2. 処理加工施設数推移
(農林水産省野生鳥獣資源利用実態調査統計表より筆者作成)

におけるジビエという存在は、先述のような鳥獣害と結びつけたものが多い印象を受ける。先述の野生鳥獣資源利用実態調査によればジビエ利用頭数のうちシカ、イノシシは2016年から2022年に至るまで合わせて90%程度を維持している。

日本においてジビエそのもの、“ジビエ”というワードが一般市民やその他の環境でどのような立ち位置にいるのかを明らかにしていきたい。また、主題を「なぜ“ジビエ”を使いたがるのか」と設定したが、これはジビエというワードそのものが野生鳥獣肉の利用にどのように影響しているのかという意味を含む。

II. 調査方法

新聞記事や論文データベース等を参照し、日本においてジビエがどのような立ち位置にいるのかについて情報を収集した。新聞記事は朝日新聞、毎日新聞、南日本新聞のものを収集した。それぞれ、朝日新聞クロスサーチ(1)、毎索(5)、南日本新聞デー

^{*1} Terashita, F., Okuyama, Y., Takisawa, Y.: Reasons for wanting to use “Gibier” - Analysis of the background and factors related to the expansion of usage -.

^{*2} 鹿児島大学農学部 Fac. Agric., Kagoshima Univ., Kagoshima 890-0065, Japan

タベース (6) を利用した。論文のデータベースは国立情報学研究所運営 CiNii Research を利用した (4)。

いずれの新聞も「ジビエ」というワードで検索をかけ、登場が何年か、登場した数がどのような推移を見せているか調べた。その中でジビエという文字を含む地名や人名といったこの研究におけるジビエとは関係のないワードを含む内容のものも多数存在したが、そのような新聞記事は除いている。これは CiNii での調査でも同様である。

CiNii での情報収集では、新聞記事と同様、ジビエというワードが出現した論文を全てリストアップし、その論文の収録刊行物にフォーカスを当てた。学術論文であるか、専門誌であるか、一般紙であるかという分類、その収録刊行物がどのような内容の論文を扱っているかという分類を行った。

Ⅲ. 調査結果

1. 新聞記事の情報収集に関して

1.1 朝日新聞での収集結果

まず朝日新聞についてである。1997年に初めてジビエというワードが登場した。登場してからしばらくは料理店の紹介であったり、季節のものの紹介といったような内容の記事が登場していく。例えば1997年12月17日『クリスマスディナーはなぜ高い? (モノわかりのいい話)』、2000年11月20日『鴨肉のテリーヌ 伊藤哲也 (もぎたてレシピ) / 北海道』等である。そして2005年に長野県信州を中心として野生鳥獣による被害への対策という形でジビエが謳われるようになる。その類の記事で最初に出てきたのが2005年3月18日『信州の「ジビエ料理」広めよう 長野でフェア、コンクールも / 長野』であった。その後そのような内容の記事を含むさまざまな記事が増加していき、2018年をピークに記事は減少していった。

1.2 毎日新聞での収集結果

毎日新聞では、1996年に初めてジビエというワードが登場した。その頃の内容は朝日新聞と同様のような、料理店の紹介といった内容のものが多く、やはり2005年に鳥獣害と結びつけたジビエの記事に取り上げられるようになる。その後の動向も朝日新聞と同様の推移を見せており、2018年を境に記事は減少している。

1.3 南日本新聞での収集結果

鹿児島県の南日本新聞における推移についてである。初めてジビエというワードが登場したのは2002年で、鳥獣害と結びつけた記事が登場したのは朝日新聞、毎日新聞に比べ6年遅れて2011年であった。なお、その記事は『[議会] 伊佐市』であり内容には『「長野県にならい、ジビエ料理を積極的に推進してはどうか」との質問には、「捕獲したシカ、イノシシが食用として流通すれば、獺も経済活動として成立する。今後、県へ積極的に働きかけていきたい』』という記述が見られた。その後は増減を見せつつも数量のピークは朝日新聞、毎日新聞と同様2018年であった。

各新聞での各年「ジビエ」出現数を図-3に示す。

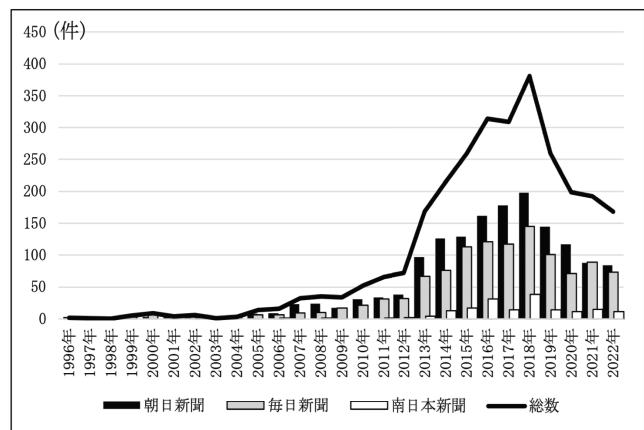


図-3. 朝日・毎日・南日本新聞における各年「ジビエ」出現数 (朝日新聞クロスサーチ、毎索、南日本新聞データベースでの検索結果をもとに筆者作成)

2. CiNii での情報収集に関して

2.1 総数について

論文の総数は289件であった。推移は、2001年に初めてジビエというワードを含む論文が出現し、その後5年間が空き、2006年に再び登場する。この2006年の論文は鳥獣害と結びつけた内容であり、農業関係の月刊誌である『現代農業』中で公開されたものである。タイトルは「害獣のシカ・イノシシが優雅に変身 ジビエ料理」とされていた。その後の論文でも、地域復興や野生鳥獣管理とは直接的に関係のないような、例えば調理関係のものや処理加工についてのものでも研究背景に野生鳥獣被害を問題視する意見をまず述べるものが殆どである。例えば、川上ほか(2013)は、趣旨はシカの食肉としての嗜好性の改良を試みるといった内容のものであるが、研究目的でシカという生き物を害獣として捉える記述がなされている(2)。また、坂田ほか(2013)は食肉加工の段階で残血を問題として取り扱うものであったが、研究背景でシカの個体数調整や有効活用といった記述がなされている(3)。そして論文の数は増加を続け、新聞記事と同様、2018年がピークになっている。ただ論文については2018年が「ピーク」というよりは他の年に比べ突出して論文の数量が多い。

2.2 内訳 (学術論文, 専門誌, 一般誌)

その内訳だが、学術論文、専門誌、一般誌に分けて推移を確認した。学術論文と専門誌と一般誌の総数がそれぞれ89件、185件、15件であった。2013年ごろまではいずれの論文もジビエが執筆対象であるものは少数だったが、それからは増減を見せつつも一定数の存在が確認された。専門誌に関しては2018年が突出して多数ではあるが、それ以外の2014年以降の数量は15件程度の論文が安定して確認された。学術論文は2018年を境に緩やかに減少傾向にある。

論文の総数・内訳別の推移を図-4に示す。

2.3 収録刊行物の分類

次にそれぞれの収録刊行物がどのような内容のものを扱うものであったか分類し、それぞれどのような増減を見せているか整理した。被害に直接あっている立場の分野というよりはジビエそのものを扱う、関わる立場の分野のもの、例えば、調理や食品加工、衛生的な関わりを持つ分野が総数は多い。

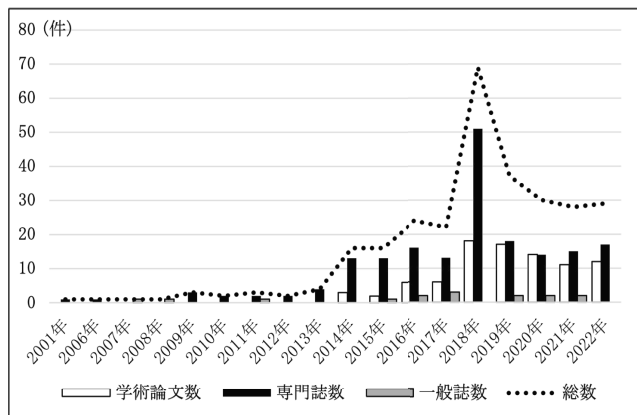


図-4. 学術論文・専門誌・一般誌・総数の各年出版数
(CiNii Research での検索結果をもとに筆者作成)

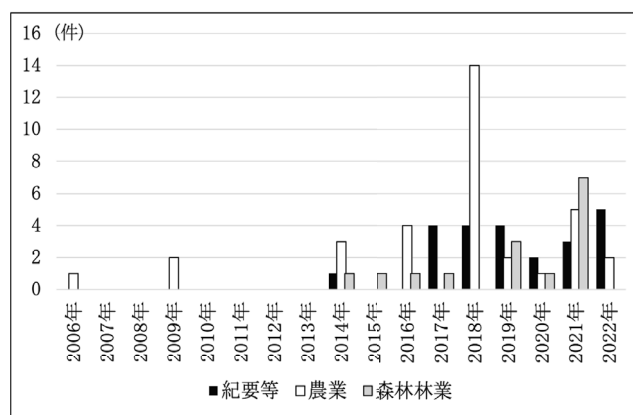


図-5. 紀要等、農業、森林林業分野の出現推移
(CiNii Research での検索結果をもとに筆者作成)

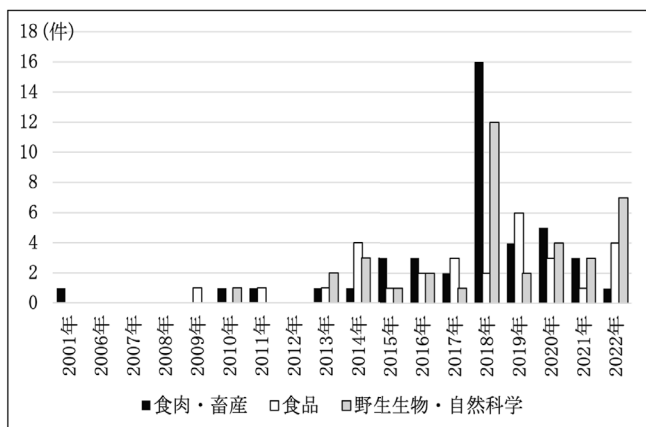


図-6. 食肉・畜産、食品、野生生物・自然科学分野の出現推移

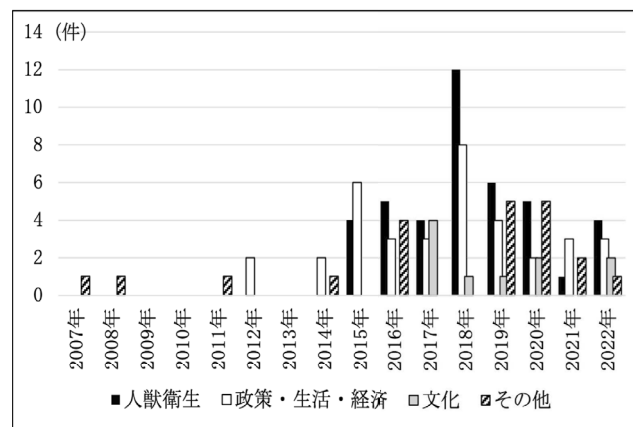


図-7. 人獣衛生、政策・生活・経済、文化、その他分野の出現推移
(CiNii Research での検索結果をもとに筆者作成)

各分野の各年出版数を図-5、図-6、図-7に示す。

論文総数の最も多かった2018年に多いのは農業分野、食肉・畜産分野、野生生物・自然科学分野、人獣衛生分野、政策・生活・経済分野であった。この年に論文が多い理由として、国産ジビエ認証制度の制定及び運用の開始(7)が要因の一つとして挙げられる可能性がある。

IV. 考察

1. 新聞記事を参照した結果・考察

いずれも2000年初頭頃に野生鳥獣を利用した肉や料理を「ジビエ」と称するようになったことがわかった。

そしてその後2005年を境に鳥獣被害と結びつけた存在という意味合いが強くなってきたようだが、これは長野県信州を中心に広まっていったということがわかった。尚、信州で何があったのかについて、信濃毎日新聞の記事も同様に収集していく予定である。

2018年をピークにジビエに関する記事が減少傾向にあることがわかった。これはジビエが一般に認知されるようになったとも考えられるが、国産ジビエ認証制度の制定も関係していると考えられる。

国産ジビエ認証制度は、2018年に農林水産省が制定、運用を開始したもので、流通するジビエの安全性を向上させ、流通経路

等の透明性の確保を図ることが目的のもので、日本全国共通の制度である。認証を受けることにより商品の差別化を図ることができ、全国共通のものであるため全国規模の取引において特に有利になるというメリットがある。また、定期監査を受ける必要があり、継続的な衛生管理基準の遵守も可能となる。

この制度はシカ及びイノシシの処理施設を対象としたものであり、他の野生鳥獣のみを処理する施設は申請することができない。このことも日本においてジビエが野生鳥獣被害と結びついている印象を受ける要因になっていると考える。

2. CiNiiを参照した結果・考察

新聞記事と同様、論文全体の総数は2018年まで増加、そこをピークに減少傾向にあることがわかった。この要因について国産ジビエ認証制度の運用開始が考えられるが、その後の減少理由については今後調査を行いたい。

国産ジビエ認証制度についての内容のものは3件であり、いずれも2018年に発表されたものである。農林水産専門誌である「週刊農林」における『ジビエ普及・振興に向けた動き 国産ジビエ認証制度で安全確保』、畜産技術協会出版「畜産技術」における『国産ジビエ認証制度の制定について』、園芸専門誌である「農耕と園藝」における『国産ジビエ認証制度の制定について』であるが、この3件のみが2018年に突出して論文数が多い理由には数理的になり得ない。この年の論文の分類には以上の3件を除く

て大きな特徴が見られず、なぜこの年に論文が多いのかについては、国産ジビエ認証制度の影響も視野に残しつつ再調査の余地がある。

鳥獣被害と結びついたジビエという内容のものが出現したのは2006年であったため、先述の2005年の出来事はやはり影響力のあるものであったことがわかる。

3. 2005 年の出来事について

新聞記事や CiNii での調査において2005年に何かがあったということがわかったためそれについて情報を収集した。

その結果、2017年に信州ジビエ研究会が発行した“信州ジビエストーリーズ (12)”において年表中2005年の欄に「野生鳥獣被害に悩む農山村で、捕獲した野生鳥獣をジビエ（肉）として有効活用しよう……。が、はじまり」という記載を発見した。具体的な出来事については不明瞭であったが、やはり2005年を境に野生鳥獣被害の対策としてジビエを利用する動きが広まったことは事実のようである。

尚、鳥獣法に関する法律において1999年に改正があった(11)が、それまで保護・繁殖、育成が主たる目的であったところに管理という理念が導入され、これが野生鳥獣被害とジビエが結びつく最初の要因になったと考える。

V. 今後の展望

各調査の中で2005年を境に長野県信州を中心に被害対策と野生鳥獣肉の理由が結びつけられるようになったことがわかったが、なぜその年でその場所なのかといった具体的な理由に関しては、今回は調査の対象とすることができなかったため、引き続き調査を進める中で明らかにしていきたい。

また、国産ジビエ認証制度の制定及び運用開始の背景として、制定以前に処理施設が増加していたということが挙げられるが、

制定以前のジビエ流通の状況や、制定前後の変化について調査を行いたい。

本論文の主題である「ジビエ」というワードが利用にどのような影響を与えているのかは現段階ではまだ不明瞭であるため、今後はジビエというワードに限らず、同義の他のワード（シカ肉、獣肉等）でもこれまでと同様の調査を行いたい。

引用文献

- (1) 朝日新聞クロスサーチ URL: <https://xsearch.asahi.com/kiji/>
- (2) 川上栄子・森下紗帆 (2013) 日本調理科学会大会研究発表要旨集 25 (0), 118-
- (3) 坂田亮一ほか (2013) 日本鹿研究 2013 (1), 6-9
- (4) CiNii Research URL: <https://cir.nii.ac.jp/articles?q=%E3%82%B8%E3%83%93%E3%82%A8&sortorder=1>
- (5) 毎索 URL: https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html
- (6) 南日本新聞データベース URL: <https://mall.373news.com/pdb2/>
- (7) 農林水産省 (2018) URL: <https://www.maff.go.jp/j/nousin/gibier/attach/pdf/ninsyou-43.pdf>
- (8) 農林水産省 (2022) URL: https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2201/spe1_04.html
- (9) 農林水産省 (2022) ジビエ処理加工施設の数・分布等
- (10) 農林水産省 (2023) URL: <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/jibie/>
- (11) 衆議院 (1999) URL: https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/housei/h145074.htm
- (12) 信州ジビエ研究会 (2017) URL: <http://www.shinshu-gibier.net/wp/wp-content/uploads/2017/05/sinsyugibierstoriesall.pdf> 4 ページ

(2023 年 11 月 10 日受付；2023 年 12 月 22 日受理)